

## 贺年片

自古以来，日本人非常重视新年的问候。

过去，每年正月初一到十五，日本人会走访平时联系较为紧密的亲友，致以新年的问候。人们会去拜访自己的东家、师父、父母、亲戚、朋友还有邻居，向大家道一声：“旧的一年承蒙照顾，新的一年也请多多关照。祝愿新年吉祥如意。”这种拜年的习俗在日语里叫做“回礼(かゝれい)”，和中文的“回礼”意思差了十万八千里。

以前，既没有邮政系统，也没有电话，更没有电子邮件，所以一开年，大家就要冒着寒风走亲访友，送上新年的祝福。

拜年的习俗历史悠久，大概可以追溯到公元8世纪的日本奈良时代。

拜年其实很辛苦，尤其是过去的王公贵族，朋友圈子太广，自己拜访不过来，所以就会派人作代表，替他们登门拜年，或者送上贺年的信函。这就是贺年片的起源。

日本的贺年片对措辞要求很严，有一套固定用语，过去的人写贺年片时总是小心翼翼的，甚至还出现过专门介绍贺年片写法的用语集。在平安时代、公元11世纪时，日本的贵族藤原明衡写了一本名为《云州消息》的书，教人怎么写信，里面也收录了贺年片用的例文。

到了1871年、明治时代，日本引进了西方的现代邮政制度，老百姓终于可以用相对便宜的价格邮寄书信了。因为日本识字率很高，所以明治时代的老百姓开始把明信片当作贺年片来使用，这就是现代贺年片的发端。另外，也是从明治时代开始，日本不再使用农历，而把公历1月1日定为新一年的正月第一天。

日本还有一个习俗，新年伊始，一定要用毛笔认真地写出一个漂漂亮亮的字，叫“新年第一笔(書初め)”。早期，贺年片都是在1月2日写“新年第一笔”的时候写的，然后再投递到邮筒里。过去的人都是慢性子，认为贺年片只要赶在小正月、也就是1月15日之前送到就可以了。

后来，随着时间的推移，日本人变得越来越性急了。大家开始觉得贺年片必须在1月1日当天送到收件人家里。从那时候开始，每到12月，日本人就会提前写好一大批贺年片并投递给邮局。另外，贺年片最早是以信件的方式寄

出的，中国的许多春节贺卡至今都会作为信件封起来寄出。但在日本，从明治时代开始，贺年片就变成了明信片的形式。

1899年，日本的邮局还把贺年的邮件规定为特殊邮件，无论在哪一天投递，都会敲上“1月1日”的邮戳。到了19世纪末，日本正式确立了“贺年邮件特殊处理”制度。

再后来，第二次世界大战爆发，战事越来越激化，老百姓也不再有心情寄贺年片。这项“贺年邮件特殊处理”制度也在1941年12月到1947年期间一度暂停，直到二战结束3年后的1948年才重新恢复。从1949年起，日本的邮局开始发售现在已经很常见的“压岁抽奖明信片”，卖得非常火爆。

其后，随着日本战后经济逐渐步入正轨，贺年片的发行量不断增加。1964年发行了10亿张，1973年增加到20亿张，到2003年时，发行量高达45亿张。不过，03年之后，发行量就转为减少了。今年、2021年，祝贺2022年的贺年片第一版发行量只有18亿2536万张，还不到2003年顶峰时的一半。现在，年轻人都习惯了在网上发送新年的问候，也有越来越多的老人表示，“今年是最后一次给大家寄贺年片，明年开始就不寄了，请原谅”。

不过话说回来，即使是在互联网时代，贺年片也有它无法替代的魅力。比如，对于长久没有联系的同学和老师，就可以通过贺年片问候一声：“久未联络，身体还好吗？”另外，如果有一些人没能及时表达感谢，也可以寄上一张贺年片送上迟到的感恩。这都是贺年片的另一种功用。

而且，有些人对自己意义不同，这些人寄来的贺年片就会变成美好的回忆。小小一张卡片很轻很薄，不占地方。上面的话语虽然简短，但感情却可以很深厚，让人铭记一辈子。

现在，我们可以通过网络轻轻松松地发送各种文字、照片和视频，但也正因为这样，手写的贺年片会显得特别温暖，许多人正在重新感受到贺年片的好处。

《加藤老师来开讲!》是NHK日本国际传媒中文广播节目《波短情长》中的小栏目，特邀日本明治大学教授加藤彻深入浅出、诙谐幽默地讲解日本文化。您有没有想要了解的日本文化或习俗? 欢迎给本节目来信或留言!



## 年賀状

昔から、日本人は新年の挨拶を重んじてきました。

昔の人は、正月の1日から15日までのあいだに、日頃お世話になっている人々の家を訪問し、挨拶をしました。主君や師匠、両親、親戚、友人、ご近所などの家を訪問し、「去年はありがとうございました。今年もよろしくお願ひします。今年が良い年となりますように」と挨拶を行ったのです。この習慣を日本語では「回礼(かいいい)」と言いました。中国語の「回礼」とは意味が違います。郵便も電話もメールもない昔の人は、回礼の挨拶のため、新年早々、寒い中を歩き回らねばなりませんでした。

回礼の歴史は古く、日本では8世紀の奈良時代までさかのぼります。

回礼は大変です。貴族たちは、つきあいが広いので、自分の代わりに使者を相手の邸に派遣し、新年の挨拶の言葉を述べさせたり、手紙を相手に届けさせたりしました。これが年賀状の起源です。

年賀状には独特の言葉遣いやマナーがあり、昔の人も、ずいぶん気を遣いました。年賀状の書き方を学ぶための例文集もありました。平安時代、11世紀の貴族である藤原明衡が書いた『雲州消息』は、手紙の書き方を学ぶための例文集ですが、年賀状の例文を収録しています。

明治時代の1871年、日本も、西洋の近代的な郵便制度を導入し、比較的安い値段で、手紙を送ることができるようになりました。日本は識字率が高かったため、明治の庶民は葉書で年賀状を送るようになりました。これが現代の年賀状の始まりです。また明治時代から、日本では旧暦ではなく新暦の1月1日を正月とするようになりました。

日本には、一年の最初に毛筆で心をこめた立派な字を書く、「書き初め」という風習があります。初期の年賀状は、1月2日の書き初めの日に書いたあと、郵便で発送しました。昔の人はのんびりしていて、年賀状は1月15日の小正月までに届けばよい、と考えられていました。

時代がくだると、日本人はだんだん、せっかちになりました。年賀状は1月1日に相手の家に届くのがよい、と考えられるようになりました。そのため12月中に、大量の年賀状を書き上げて郵便局に出すようになりました。また年賀状は本来、封書で送るものでした。中国の新年カードは、今も封書が多いですね。しかし日本では、

明治時代から葉書による年賀状が普及しました。

1899年から、日本の郵便局は「年賀郵便」を、特別な郵便として取り扱うようになり、投函日に関係なく「1月1日」の消印を押すようになりました。こうして19世紀の末に「年賀郵便特別取り扱い」の制度が確立しました。

第二次世界大戦が激化すると、世の中は年賀状どころではなくなりました。「年賀郵便特別取り扱い」は1941年12月から1947年まで中断し、第二次大戦が終わって3年後の1948年、やっと再開しました。また、1949年から、現代と同様の「お年玉付郵便はがき」が初めて発売され、爆発的に普及しました。

戦争では、日本の多くの町が焼け野原となりました。戦争で亡くなった人、海外から帰国できない人も、たくさんいました。1949年、現在と同じ「お年玉付郵便はがき」が最初に発売されたころは、年賀状は、生存や安否を確認する役割もあったのです。

日本の戦後の経済成長が軌道に乗ると、年賀はがきの発行枚数も増えました。1964年には10億枚、1973年には20億枚になり、2003年には45億枚になりました。しかしその後、発行枚数は減り、今年2021年に発行した2022年用の年賀はがきの当初発行枚数は18億2536万枚で、ピークだった2003年の半分以下です。年始の挨拶もインターネットで済ませる若者や、「年賀状をみなさんに出すのは、今年で最後にします。」という高齢者が増えました。

しかし、インターネットの時代でも、年賀はがきには独自の魅力があります。昔の同級生や恩師に「ご無沙汰しておりますがお元気ですか」と安否をたずねたり、お礼の返事を出しそこねた相手に年賀状で遅ればせながらお礼を述べたりできるのも年賀はがきの効用です。

大事な人の年賀はがきは、思い出の品になります。はがきは小さくて薄く、かさばりません。はがきに書ける言葉は短くても、思いは深く、いつまでも心に残ることがあります。

インターネットで文字や写真や動画を気軽に送れる今だからこそ、手書きのぬくもりや、年賀はがきの良さが、見直されています。

「加藤先生の開講コーナー！」はNHK国際放送のラジオ番組「波短情長」のコーナーです。明治大学の加藤徹教授が、日本の文化について楽しく解説します。あなたの知りたい日本の文化や風習は何ですか？メッセージもお待ちしております。

